海底空母・伊四〇〇
パナマ運河を破壊せよ
檜山良昭
●文庫書下ろし／長編スペクタクル小説
1400

文庫書下ろし・長編スペクタクル小説
パナマ運河を破壊せよ　海底空母・伊四〇〇
著　者　檜山良昭（ひやまよしあき）

1988年11月20日　初版1刷発行
1988年12月1日　　2刷発行

発行者　大坪昌夫
印　刷　共同印刷
製　本　共同印刷

発行所　株式会社　光文社
〒112-11 東京都文京区音羽2-12-13
電話　東京 03(942)2241(代表)
振替　東京 6-115347

© Yoshiaki Hiyama 1988
落丁本・乱丁本はお取替えいたします。
ISBN4-334-70802-1　Printed in Japan

文庫書下ろし・長編スペクタクル小説

パナマ運河を破壊せよ

海底空母・伊四〇〇

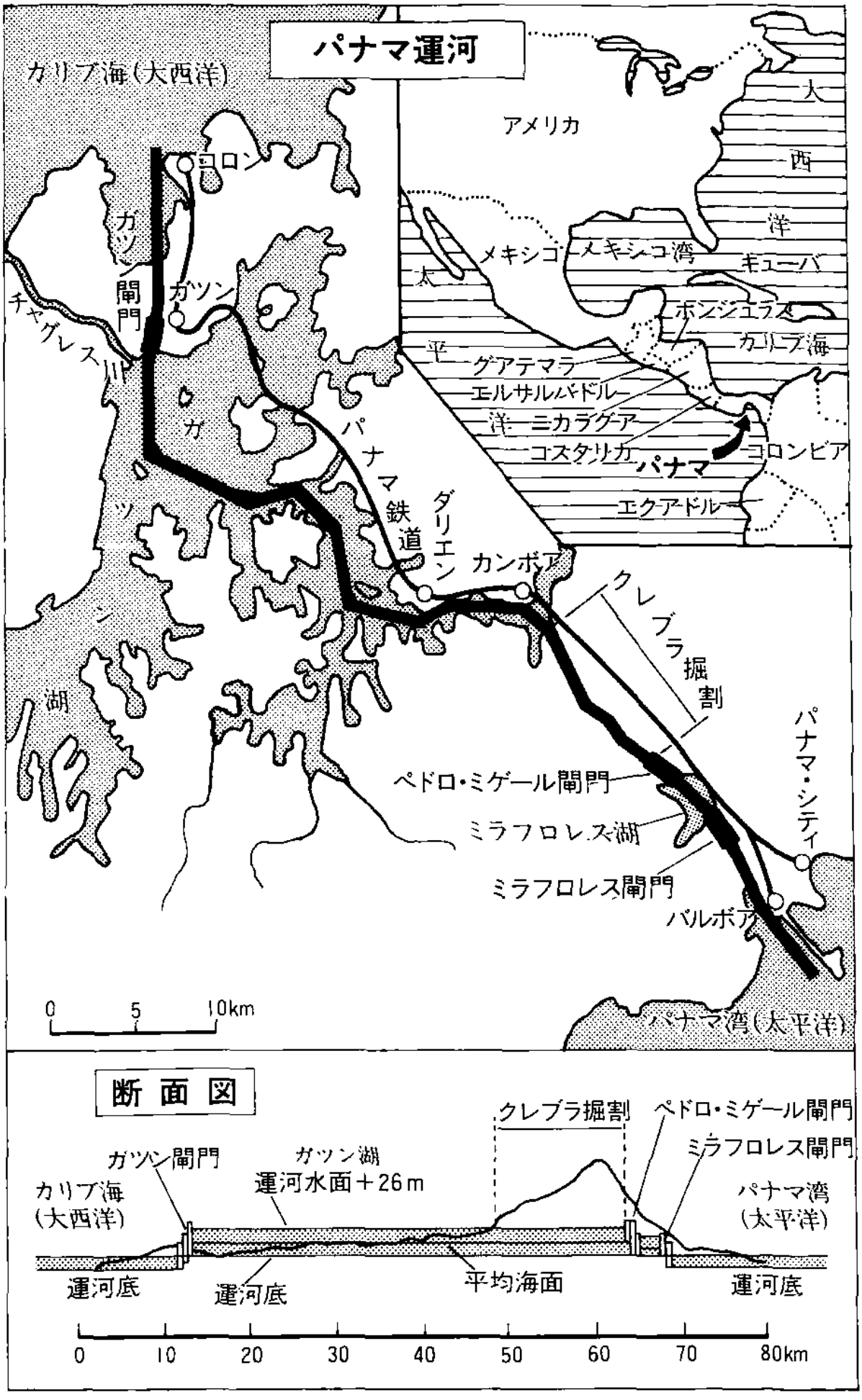
檜山良昭（ひやまよしあき）

この作品は光文社文庫のために書下ろされました

目次

まえがき 5
第一章 出撃 12
第二章 遭遇 70
第三章 欺瞞 120
第四章 攻撃 168
第五章 逃走 206
第六章 戦闘 245
あとがき 286

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com


パナマ運河
カリブ海(大西洋)
コロン
ガツン閘門
ガツン
チャグレス川
ガツン湖
パナマ鉄道
ダリエン
カンボア
クレブラ掘割
パナマ・シティ
ペドロ・ミゲール閘門
ミラフロレス湖
ミラフロレス閘門
バルボア
パナマ湾(太平洋)
0 5 10km
アメリカ
大西洋
メキシコ
メキシコ湾
キューバ
ホンジュラス
カリブ海
太平洋
グアテマラ
エルサルバドル
ニカラグア
コスタリカ
パナマ
コロンビア
エクアドル
断面図
クレブラ掘割
ペドロ・ミゲール閘門
ミラフロレス閘門
ガツン閘門
ガツン湖
運河水面＋26m
カリブ海
(大西洋)
パナマ湾
(太平洋)
運河底
運河底
平均海面
運河底
0 10 20 30 40 50 60 70 80km

まえがき

昭和十七年一月、連合艦隊司令長官の山本五十六は瀬戸内海の柱島泊地に係留された連合艦隊旗艦の「長門」で戦争第一年目の正月を送った。ハワイの真珠湾における大戦果の興奮の余韻が未だ覚めやらない時期である。山本長官は真珠湾奇襲作戦の後の第二段作戦をどうするか思慮を巡らせていた。

山本長官は常識的な作戦ではアメリカに勝てないのを知りすぎるほど知っていた。もし日本が勝利する場合があるとすれば、アメリカの急所に対して攻撃に次ぐ攻撃、奇襲に次ぐ奇襲を行なうしかないと考えていた。

ちょうどこのとき連合艦隊司令部は潜水艦部隊による大規模な偵察、交通破壊、要地砲撃を実施させていた。この作戦を検討しているとき、山本長官はふと、潜水艦でアメリカの西海岸ではなく、東海岸を攻撃したらどうかと思いついた。

日本軍が東海岸のアメリカの都市を攻撃するとはアメリカ側はまさか思うまい。東海岸には、とりわけ東海岸北部には工業や産業の中心都市が並んでいる。与える物質的な損害はたかがし

れているかもしれないが、アメリカ国民に与える精神的なショックは大きいはずだ。だが、潜水艦が喜望峰を回り、大西洋を横断することは容易なことではない。途中の補給基地がすくなくとも二、三カ所なくては不可能である。しかも補給基地に寄港したり、洋上補給をすれば、アメリカ軍に察知され、奇襲攻撃はおぼつかない。それなら、航続距離の長大な潜水艦を建造したらどうだろう。海岸近くに接近して砲撃するのでは、効果も弱いし、危険でもある。攻撃は飛行機でなくてはならぬ。いっそこの潜水艦に攻撃機を数機搭載し、潜水空母としたらどうだ。一隻ではたいしたことはできないから、思いきって二十隻も造ったらどうなのか。

山本はこの思いつきを最も信頼する作戦参謀の黒島亀人に打ち明けた。変人参謀と言われた黒島もこの思いつきに賛成し、軍令部に出掛けた折りに、連合艦隊の要望として潜水空母の建造を説明した。

真珠湾奇襲作戦の成功で、山本長官の要求はどんな無理難題でも通るときである。それに軍令部も対米戦での決め手を欠いていた。潜水空母艦隊はその決め手になるかもしれないと軍令部も考えたのである。

軍令部は山本長官の思いつきを検討し、海軍艦政本部に「攻撃機を数機搭載でき、アメリカ東海岸まで往復できる潜水艦の建造は可能か」と問い合わせた。艦政本部の潜水艦設計主任である片山造船大佐はとほうもない性能要求に驚きながらも、「可能である」と回答した。

これまで艦政本部が建造した潜水艦で最大のものでさえ、水上偵察機を一機しか搭載せず、

最大航続距離は二万海里である。攻撃機は偵察機よりも重量も重いし、機体そのものも大きい。それを一機以上搭載するとすれば、潜水艦自体がはるかに大きくなる。また航続距離を延ばすには巨大な燃料タンクが必要になってくる。いっぽう潜水艦にはこれまでと同じか、勝るほどの速力と敏捷性が必要である。運動性能は潜水艦が巨大であればあるほど劣ってくる。しかし、片山造船大佐はこれまでの技術の蓄積から、できると判断したのである。

大和や武蔵のような大型戦艦の建造に反対した山本が、大型潜水艦の建造に熱心だったというのは面白い。同時に山本の先見の明に驚くはずである。山本の発想は現代の戦略原潜艦隊のはしりであった。

昭和十七年五月に行なわれた海軍技術会議はこの潜水空母を十八隻建造することを決めた。一隻あたり二機の水上攻撃機を搭載する。最大航続距離は約四万海里、地球を一周半以上回れる。四カ月間は補給なしで作戦行動ができる。十八隻のうち二隻は旗艦設備を持ち、べつの二隻は予備旗艦設備を持つ。

搭載する攻撃機はこれまでの潜水艦搭載機の改良ではだめなので、愛知航空機製造会社であらたに製作することになった。最初の三隻と搭載機が完成するのは二年後と考えられた。

一号艦の建造が呉の造船所で始まったのは昭和十八年一月である。大和、武蔵の建造のときと同じほど厳しい機密保持がはかられた。この潜水空母は「特型潜水艦」と呼ばれ、十八隻すべてが完成した暁には、世界の海に展開して、アメリカの本土や艦船に奇襲攻撃を加えるはず

だった。ミッドウェー海戦で虎の子の空母四隻を失った後、山本長官はこの潜水空母艦隊に望みを託していた。

しかし、昭和十八年に入ると、日本は攻勢から防戦いっぽうに追い込まれ、潜水艦戦術も通商破壊戦術に切り替える必要に迫られた。それに特型潜水艦全艦が完成する五、六年後には、戦争がどうなっているかわからないということもあった。アメリカ東海岸を奇襲攻撃する戦略上の意義が、そのころにはなくなっているかもしれないという心配もあった。それなら目下必要な通商破壊戦用の中型潜水艦を多数建造したほうがいいという声が潜水艦関係者から起こった。

海軍軍令部で潜水艦作戦の主務参謀をしていた井浦祥二郎（いうらしょうじろう）（当時少佐）は、初めから山本長官の構想に疑問を感じていた。彼は特型潜水艦の全艦の建造を中止し、その資材と予算で中型潜水艦を多数建造すべきだという考えだった。十八年二月に彼は艦政本部の潜水艦設計主任である片山造船大佐の意見を聞いてみた。

「特型潜水艦の建造を中止し、通商破壊戦用に中型潜水艦を建造したいのだが、中止できるか」

「すでに四隻程度の潜水母艦は資材を発注しているので、いまさら建造を中止にはできない。そのほかのものはまだなので中止してもよい」と片山造船大佐は返事した。

そこで井浦はすったもんだの末に昭和十九年度以降に建造に着手する十三隻の建造を取り止めるということで、どうにか海軍部内の意見をまとめた。この間、潜水空母艦隊案に固執する

人たちは山本をはじめとしてかなり強硬に中止に反対した。しかし、これらの人たちも不利になっている戦況は無視できず、五隻だけを建造するという井浦の案に同意するしかなかった。

正式に海軍軍備計画で中止がきまったのは同年四月二十二日だが、これは山本長官が戦死した四日後にあたっている。山本長官の死とともに、世界に類をみない潜水空母艦隊の構想も夢と消え去ったのである。

山本が構想したアメリカ東海岸に対する攻撃の代わりに、特型潜水艦でパナマ運河を破壊する作戦が考えられた。隻数を削減した代わりに、攻撃力を増すために、特型潜水艦では、二機の予定だった搭載機を三機に増やし、おりしも建造中の中型潜水艦二隻を改装して、それぞれ搭載機を二機ずつにする計画が立てられた。

建造を認められた五隻の潜水空母のうち、一番艦は昭和十九年十二月三十日に、二番艦は昭和二十年一月八日に完成した。そして三番艦は終戦直前の七月二十四日に完成したが、あとの二隻を建造する力は日本には残されていなかった。完成した潜水空母は全長が百二十二メートル、最大幅が十二メートル、基準排水量が三五三〇トン、満載排水量が五七〇〇トンという巨大なものである。

一番艦は伊四〇〇、二番艦は伊四〇一と命令された。この竣工と前後して、伊一二潜水艦型を改装した伊一三と伊一四の二隻も完成した。これらの四隻は第一潜水隊を編成し、準備ができ次第、パナマ運河を破壊する作戦に使われるはずだった。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

四隻の大型潜水艦は呉を基地として瀬戸内海西部で日夜訓練に励んだ。いっぽう愛知航空機製造会社に発注した搭載機は、一七式特殊攻撃機として昭和十七年八月に基礎計画を終え、翌年十一月に第一号機が完成した。この搭載機の名前は「晴嵐（せいらん）」と命名され、終戦までに二十八機が製造された。

パナマ運河を破壊する目的は、大西洋から太平洋に回されてくる米海軍の艦船の回航を妨害することである。ところが、ドイツの降伏が時間の問題となった昭和二十年になると、ヨーロッパ戦線の連合軍がドイツの降伏後に太平洋戦線に回されてくるおそれがあり、それを妨害するためにいっそうパナマ運河に対する攻撃の必要が強まった。

第一潜水隊は昭和二十年三月末に個艦訓練を終え、福山（ふくやま）海軍航空隊を基地としていた「晴嵐」隊との協同訓練に入った。前年秋に第六艦隊首席参謀として潜水艦作戦の主務者であった井浦は、第一潜水隊司令の有泉龍之助（ありいずみりゅうのすけ）少将と攻撃計画を練った。初めは五月に出撃する予定だったが、晴嵐機の故障や製造の遅れのために六月に延びた。計画では約一カ月後にパナマ運河のカリブ海から太平洋側への最初の入口であるガツン閘門（こうもん）に十機の晴嵐で体当たり攻撃を加えるというものである。乗員の生還を期さない特攻であった。このために乗員はよりすぐりの者が選抜された。

あとがきに書いたように、この作戦は時機を逃し、とうとう実行されないままに終わった。莫大な建造費をかけ、二年がかりで準備してきたパナマ運河爆撃作戦はあっけなく実行されな

いままで終わってしまった。馬鹿馬鹿しいと言えば、これほど馬鹿馬鹿しい話はない。

伊四〇〇と伊四〇一の大きさを上回るアメリカの原子力潜水艦のトライトンが完成したのは一九五九年だが、それまで伊四〇〇と伊四〇一は史上最大の潜水艦だった。通常動力型潜水艦では、まだこれより大きな潜水艦は建造されていない。それがまったく働かないままに戦争は終わったのである。

この小説は、この作戦が実施されたと仮定して書かれている。もし伊四〇〇と伊四〇一がパナマ運河を攻撃したら、どんな戦いぶりをしたろうか。これを当時の戦況に即して忠実に再現してみた。

一九八八年十月

著　者

第一章　出撃

1

昭和二十年五月八日、ルーズベルト大統領の急死によって副大統領から大統領になったトルーマンは、この日六十一歳の誕生日を迎えた。彼はまだ大統領になって一カ月もたっていなかった。

早朝に爽快な気分で目覚めた彼は母と妹に手紙を書いた。

「きょうは歴史に残る日となるでしょう。午前九時に私はドイツ降伏を全国に向けて放送します。降伏文書の調印は昨日の朝終わっており、戦いはすべての戦線で今夜十二時に停止されます。素晴らしい誕生日の贈り物だと思いませんか」

東部標準時間の午前九時、ホワイトハウスの放送室に入ったトルーマン大統領は満面に笑みを浮かべ、マイクに向かって次のような発表を行なった。

「これは厳粛にして輝かしい一瞬であります。アイゼンハワー元帥からの報告によれば、ドイツは国連に対して降伏を申し出たそうです。自由の旗がヨーロッパにひるがえっています。それからきょうは私の誕生日でもあります」

イタリアに続いてドイツが降伏したという発表である。ドイツのヨードル将軍がアイゼンハワー元帥の司令部で停戦協定に調印したのはヨーロッパ標準時間の七日午前二時四十一分である。

さらにトルーマン大統領は日本に対して降伏勧告の演説を行なった。

「ナチス・ドイツは敗北した。日本国民はわが陸海軍の重圧下にあえいでいる。戦争がながびけばながびくほど、日本国民の苦悩と困憊はましてくる。しかもそれはまったく無益な苦しみなのである。日本の陸海軍が無条件降伏し、武器を捨てるまでは、私たちの攻撃はいつまでも続くだろう……」

この発表はアメリカ全土に放送されただけでなく、サン・フランシスコ放送の日本向け番組でも放送された。

☆　☆

「GF電令作第六一二号

第一潜水隊は十日未明に出撃をめどとし、急速出撃準備を完成し、内海西部に待機すべし」

呉の第六艦隊司令部に連合艦隊からの命令が飛び込んできたのは五月九日午前十一時十七分である。潜水艦作戦を統合、指揮する第六艦隊司令部は一月から吉浦町にある呉潜水学校の建物のなかに移っていた。それまでの艦隊旗艦である潜水母艦の「筑紫丸」が輸送船に流用されたためにオカに上がるほかなくなったのである。

「井浦君、とうとうきたよ。連合艦隊司令部からの出撃命令だ」

首席参謀の井浦祥二郎中佐が呼ばれて長官室に入っていくと、第六艦隊司令長官の醍醐中将がそう言って連合艦隊司令部からの命令書を渡した。醍醐の顔は複雑に曇っている。黙って受け取った井浦はさっと目を通した。顔を上げた井浦はまず醍醐長官、次に隣りにいる艦隊参謀長の佐々木半九少将の顔を見つめた。二人も井浦が何か言うのを待っていた。

「やはりきましたか。それではすぐに第一潜水隊を呼び戻し、出撃の準備をさせましょう。私が第一潜水隊に連絡します」

井浦はきっぱりそう言った。肉づきが良い顔のがっしりした体形の軍人である。

「しかし、晴嵐隊のほうはまだじゅうぶんな訓練をしていないぞ。それに機体の調子だってあまりよくないし」

醍醐は歯切れが悪そうに言う。この出撃命令に乗り気ではないと見える。晴嵐とは第一潜水隊の四隻の潜水艦に搭載している水上攻撃機だが、編成されてまもないために乗員の練度が低かったり、機体そのものが故障続きだった。このために醍醐は晴嵐隊の訓練と機体の整備にも

っと時間がほしいと考えていたのである。

「出撃を遅らせれば、パナマ運河に対する攻撃の機会を失うおそれがあります。明日第一潜水隊を出撃させても、パナマ運河を攻撃できるのは早くても三週間後です。それより遅れたら、ヨーロッパの連合軍は太平洋に送られてしまい、パナマ運河を攻撃する意味がなくなってしまいます。有泉司令も早期攻撃を主張しています」

連合艦隊の出撃命令は雷作戦と命名したパナマ運河攻撃作戦のためであるのはあきらかである。この作戦の立案者は井浦自身である。前年の八月に第六艦隊司令部首席参謀に就任して以来、彼はこの作戦を研究し、ドイツが降伏すると思われる五月を予定して準備を進めてきた。

第一潜水隊の四隻の潜水艦――伊四〇〇と伊四〇一、それに伊一三と伊一四は二年も前からパナマ運河を攻撃するという、ただそれだけの目的のために建造された。ほんらいは井浦はこれに反対だった。この四隻の大型潜水艦を建造するなら、通商破壊戦用の中型潜水艦を数多く建造したほうがましだと考えていた。

しかし海軍全体の方針として建造されてしまってはしかたなく、それならパナマ運河攻撃を成功させようと懸命に準備してきたのである。しかし資材の不足などから潜水艦に搭載して、パナマ運河を攻撃するはずの晴嵐攻撃機の製造が遅れ、ようやく晴嵐隊として十機が編成されたのは四月である。ところが急いで製造したためか晴嵐機は故障が多かった。醍醐長官がしぶっているのも、もし出撃させても成果があがらないのではないかと心配したからである。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com